農林水産大臣賞受賞

棚田は宝　無限の力

受賞者　大中尾（おおなかお）棚田保全組合

（長崎県長崎市）

■　地域の沿革と概要

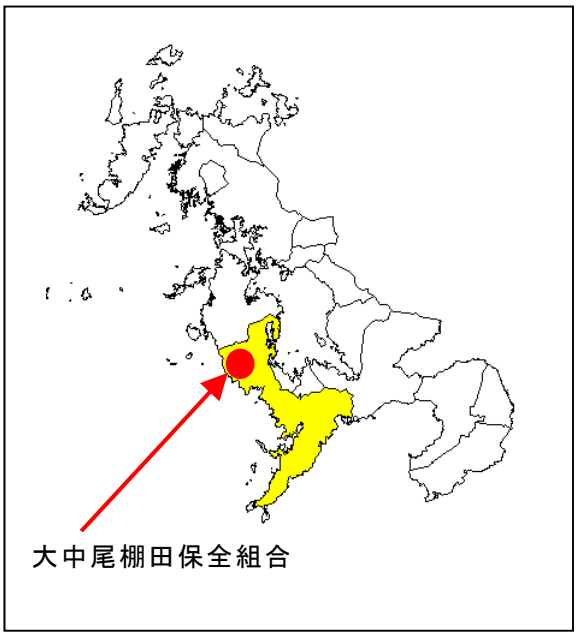
大中尾棚田保全組合のある大中尾地区は、長崎市の北西部、旧外海（そとめ）町の神浦（こうのうら）地域にある。神浦地域には、平成２年に環境庁により「日本一の清流」の認定を受けた神浦川やその自然と親しむことのできる「そとめ神浦川河川公園」がある。

大中尾地区は、神浦の中心部から扇山に向かって広がる山間部にある。旧大村藩の大村郷村記には、大中尾は 1746 年に知行開きされたと記されている。

大中尾地区は、水源が近くになかったため、先人達が、神浦川上流の山奥から約 4.2km に及ぶ大井手水路を整備し、１筆１筆の田んぼを耕してきたと言われている。

大井手水路の途中には高さ約 23m の滝があり、大変な難工事だったが、その当時のお殿様が「千両箱を積んでも出来んのか。」と工事職人に頼み込んで作ったという話が残っている。その水路の勾配は 0.7%程しかなく、測量機器がない江戸時代に作られたのはすごいということである。水害等の被害を受けた時も、その時代の水路保全組合が協力して補修工事を行い、今日まで大切に守り続けられてきている。

第１図　位置図



第１表　地区の概要

事　項	内　容	
地区の規模	集落の集合体	
地区の性格	機能的な集団等	
農 家 率 （内訳）		36.8%
	総世帯数	106戸
	総農家数	39戸
専兼別農家数 （内訳）	専業農家	x
	1種兼業農家	x
	2種兼業農家	x
農用地の状況 （内訳）	総土地面積	2,982ha
	耕地面積	8ha
	田	6ha
	畑	2ha
	耕地率	0.3%
	農家一戸当たり耕地面積	0.2ha

■　むらづくりの概要

１．地区の特色

「おいしい棚田米を生産するだけでなく、地域の宝である棚田を次の世代

に引き継いでいくための事業に取り組み、より多くの方に農業・農村の現実と価値を認識してもらうとともに、地域住民の融和、都市住民との相互理解を図り、お互いのふるさととして心の融和を図りたい。」という地域の希望がある。

写真１　大中尾棚田

そこには、大中尾棚田保全組合の前会長の「大中尾棚田で米を作らなくなれば、棚田が無くなり、この集落自体が無くなる。先祖代々受け継いできた棚田を自分たちの代で無くすわけにはいかない。棚田が無くなるということは、自分たちの集落“ふるさと”が無くなるということを認識してほしい。絶対にそういうことがあってはならない。」と地域に対する熱い想いがある。

その想いに共感した都市住民のサポートもあり、平成 14 年度に県下で初めて「棚田オーナー制度」を取り入れた。実際に受入を始めると、年々広がりを見せその数を増やし、開始から 13 年経った平成 27 年度には 38 組の実績でそのリピーター率は 82%となっている。

体験の受入時には、親子３世代や職場の仲間、大学のゼミのグループもある。また、同時に、総合学習への取組の一環として地元小学生や中学生等の体験学習を受け入れ、そのことをきっかけに、保育園や学童保育の農業体験を受け入れるようになった。

２．むらづくりの基本的特徴

（１）むらづくりの動機、背景

棚田の用水を確保している約 4.2km の大井手水路の維持・管理のため、大井手水路保全組合があり、水路の管理を行っていたが、農道整備、水路整備等が必要となり、大中尾地区で平成 10 年度から 12 年度の３年間、「棚田地域等緊急保全対策事業」に取り組み、この時、地区内で大井手水路と棚田について再認識されるようになった。

また、平成 11 年７月に、大中尾棚田が「日本の棚田百選」に選定されたことで、地元では棚田に対する意識が変化し始めた。

同年、県主催の都市農村交流事業により、「西彼杵半島体験ツアー」が実施されることになり、受入について地元との協議を始めると、「何も無いところに都会の人が来るのだろうか？」「都市部の人に来てもらうのに何をしたらいいのだろうか？」という反応が多かった。

しかし、旧外海町には、すでに個人的に農産加工体験を受け入れている方もあり、「難しく考えずに、まずはやってみよう。」ということになった。

平成 12 年度には、県の都市農村交流事業に町として取り組むことを打ち出し、その時に立ち上げた協議会の委員に、大中尾地区の代表として大中

尾棚田保全組合の前会長が入っていた。

協議会では「日本の棚田百選」の選定を受けた大中尾地区を中心とした事業を展開する計画が立てられ、委員により、地域内の“宝探し”を行い、体験メニューを検討し、事業内容が組み立てられた。

写真２　棚田オーナー制度を開始

平成 14 年３月､水路を管理する組織「大井手水路保全組合」を母体として、41 名の会員により、「大中尾棚田保全組合」が設立された。

（２）むらづくりの推進体制

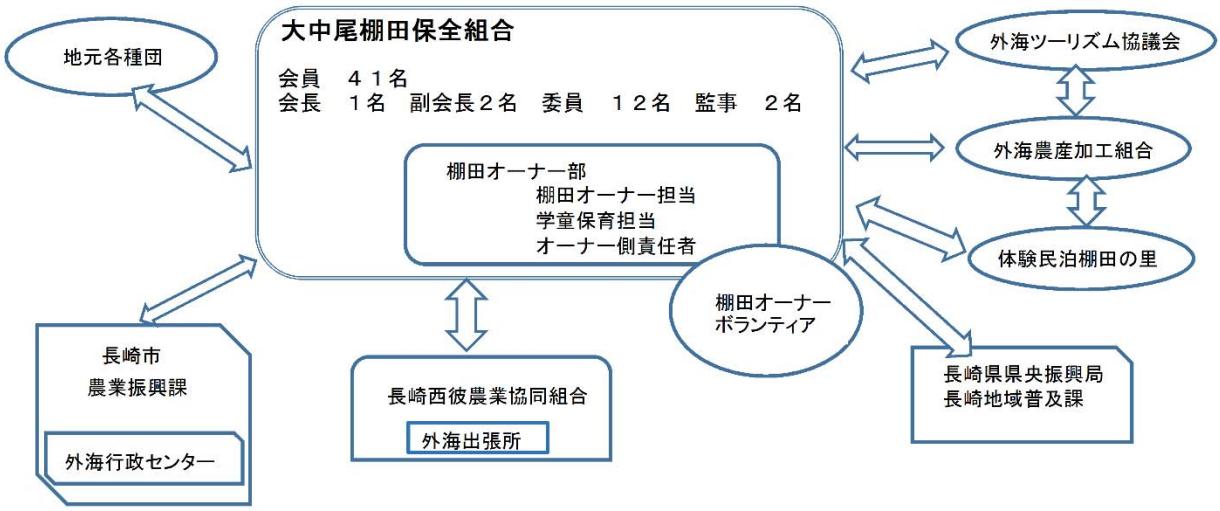
ア　大中尾棚田保全組合

会員数 41 名、会長１名、副会長２名、委員 12 名、監事２名で構成されている。総会は年１回４月に、役員会は各種事業実施前に数回開催され、定例的には開催されてはいない。

組合本会は組合運営の他に、グリーン・ツーリズム事業、棚田景観の推進事業、後継者育成事業、大中尾棚田協働支援事業を実施している。

組合は会費、中山間地域等直接支払交付金、長崎市単独補助金（グリーン・ツーリズム関連)、棚田オーナー運営事業と棚田火祭り協力金等で運営されている。

第２図　むらづくり推進体制図



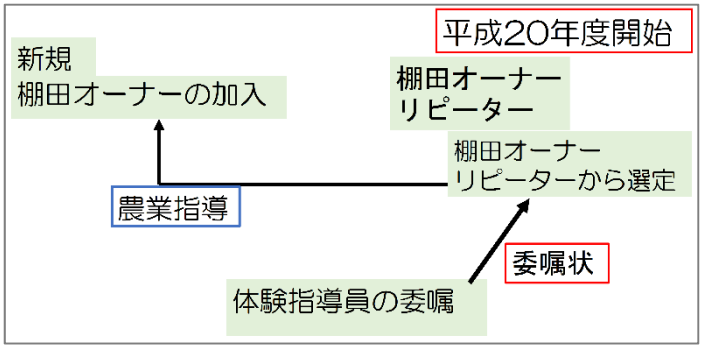
イ　棚田オーナー部

下部組織として棚田オーナー部があり、棚田オーナー担当、学童保育担当、オーナー側責任者が決められ運営されている。オーナー側責任者とは棚田オーナー制に申し込んだ側の責任者で組合組織外から担当者

が選任されている。

活動内容は棚田オーナー活動支援と各種組織の農業体験の受入で、棚田オーナー制度の会費により運営されている。

第３図　棚田オーナーのオーナー制度への協力



ウ　役員会

大中尾棚田は大中尾北、上、下の３集落からなっており、大中尾棚田保全組合はこの３集落から女性を含む委員が選定されており、水稲を作付けしていない委員もいる中で、各種イベントの前に役員会が２～３回開催され意思決定がされている。

■　むらづくりの特色と優秀性

１．むらづくりの性格

大中尾棚田保全組合ができたことで､大中尾の棚田は､“自分達だけのもの”という考えから、“自分達だけのものではなく、多くの人で守っていくもの“という考えに変わっている。

棚田オーナー制度を導入し地域外の力を借りる稲作に取り組み、大中尾棚田を広く紹介するためのイベントを開催し、都市住民と交流の場を設定し、交流を深めている。また、棚田の稲作を農作業体験受入という形で学童保育や小学校、都市住民へ理解を深めてもらっている。

棚田トラストへの取組により、長崎市内より学生ボランティアの参加を得て、約 100 名の大学生を受け入れ、地区外の若い世代へも棚田と稲作についてその必要性と素晴らしさを伝えている。

２．農業生産面における特徴

（１）棚田で米を作り続けることが大中尾棚田保全組合の目的であり、棚田の水稲栽培は高齢化が進み、米価の下落、資材の高騰により厳しくなっている中ではあるが現在も美味しい米が作られている。組合設立後からは耕作できなくなった棚田のほ場については組合内で栽培者を募り荒らすことなく米作りが続けられている。

（２）棚田オーナー制度は平成 14 年に長崎県下で初めて取り組まれ、大中尾棚田の存在を広く一般に知ってもらう場として提供されている。基本作業は田植え、草取り・草刈り、稲刈り、稲架け、稲降ろし・脱穀で、大中尾の生産者と都市住民との交流が行われている。平成 14 年度に１組から始まり､平成 27 年度は 38 組になり､そのリピーター率は 82％になっている。また、平成 20 年度から棚田オーナーのリピーター13 名が組合より新規オーナーへの農業を指導する体験指導員として選定され棚田オーナー制度

の運営の一部を担っている。

（３）大中尾棚田の用水を確保するため全長約 4.2km の大井手水路があり、その維持・管理を行っているが、棚田オーナー制度の開始以降基本作業に無い水路清掃への参加がされている。棚田オーナー制度が回を重ねるごとに、オーナーと大中尾棚田の一体化が進んできている。

写真３　大井手水路の清掃

（４）平成 25 年度に棚田トラスト制度（大中尾棚田協働支援事業）への取組を始めている。これは、棚田オーナー制度に取り組み始めた後、協働で何らかの取組ができないかを模索してきた結果である。25 年度は７組の会員と学生ボランティア 105 名の参加があった。

（５）平成 26 年度は企業の環境保全活動への取組と協働し、棚田トラスト制度と企業の取組を合体し、「大中尾棚田トラストアンドアクアソーシャルフェス」として活動を行った。この取組により参加者が大きく伸び、延べ 260 名の参加者があったが、その参加者の主体は長崎市内４つの大学からの学生の参加である。

（６）大中尾地区の水稲以外の作物は露地野菜であるが、高齢化、小家族化が進み自家消費はわずかな量しか必要でない中、棚田オーナー制度等の返礼品や各種イベントでボランティア等への食事提供のための地元食材として利用が拡大し、水田以外の畑地の利用も行われている。地元農産物が各種イベントで地元食材としてイベント参加者へ提供される体制が整い、生産者と消費者の顔が見える関係ができている。

（７）平成 20 年度に長崎市と雲仙市で共同開催された「第 14 回全国棚田サミット」で地元神浦小学校が棚田に関する事例紹介を行っており、子ども達にも棚田について考えてもらうことができた。その後、大中尾棚田火祭りで神浦小学校全校児童により「棚田へ行こう」等の合唱での参加が行われるようになり、大中尾棚田火祭りへの参加が神浦小学校の学校行事の一つになっている。

（８）棚田オーナー部では、例年、学童保育施設等に対して水稲の農業体験を実施している。これらの活動を通じて地域外の子どもらへも棚田に対する理解を深めてもらっている。

（９）大中尾棚田保全組合では委員に女性を加えて、女性の立場での各種イベント運営に対する意見やボランティア等の食事への助言がされている。

当女性委員は外海ツーリズム協議会で大中尾地区郷土料理づくりの田舎料理体験のメニューに取り組んでおり、ボランティア等への地元食材を

使った食事の提供には欠かせない存在である。大中尾棚田トラストアンドアクアソーシャルフェスには海外留学生も参加しており、海外の若者にも伝えられている。

写真４　イベントでのボランティア

また、大中尾棚田保全組合の総会時には弁当という形で郷土料理の提供も行っている。

さらには、ツーリズムのメニューに体験民泊があり、大中尾棚田で「満天の星と虫たちの合唱を聴きながら過ごす夜」体験ができる。

３．生活・環境整備面における特徴

（１）棚田オーナー制度、案山子コンテスト in 大中尾棚田等の開催により地域外からの訪問が増えていく中、地域に公衆トイレの必要性が高まり、平成 16 年度に事業を活用しトイレ整備を行っている。棚田の中での農作業や女子学生の参加も増える中無くてはならないものになっている。

（２）平成 20 年「第 14 回全国棚田サミット」の雲仙市との共同開催時にイベントとして実施し、それ以降稲刈り後のイベントとして実施している。実施に当たっては、棚田オーナーをはじめ多くのボランティアの協力を得ながら開催されており、棚田に並べられた 6,000 個の竹灯籠に火がともり、火文字が浮かび上がる。

平成 28 年は、餅つき体験、いのしし焼肉体験、お楽しみ抽選会、餅まきのイベントが開催され、夕方に灯籠への点火が行われ、二胡の演奏がされる中、恒例の火文字が棚田に浮かびあがった。浮かび上がる文字は毎年違い、28 年は一般募集を行い、大中尾棚田トラストアンドアクアソーシャルフェスで繋がりのある学生の案が採用されている。約 1,000 人の方が大中尾棚田火祭りを体験した。

写真５　棚田火祭りでの火文字

（３）水田法面、畦管理も、水稲栽培期間中、各種行事が実施され多くの訪問者があること、また、農業体験に草取り・草刈りがあることで十分に行われている。また、一部の法面には彼岸花等を植え棚田の景観向上にも取り組んでいる。各ほ場周辺も資材の袋等の放置が無いように十分な管理に取り組まれている。

（４）棚田オーナー制度は家族ぐるみの参加、大中尾棚田トラストアンドアクアソーシャルフェスは長崎市内の大学生で、なかには海外留学生も参加、大中尾棚田火祭りは老若男女の参加があり、都市住民との交流が図られている。また、大中尾棚田のＰＲのため案山子コンテスト in 大中尾棚田や大中尾棚田フォトコンテストが開催され、都市住民が大中尾棚田に気軽に遊びに来るきっかけとなっていたこともあり、大中尾地区を散策コースとして棚田を訪れる方も増え、稲が栽培されていない時期でも大中尾棚田にある休憩舎で自然に浸りながら昼食をとる様子も見かけられる。

写真６　大中尾棚田年間行事（看板）

（５）大中尾を訪れる人は、棚田オーナー制度、農業体験等で毎年延べ 1,000 人程になり、これらの大中尾棚田を訪れる人は、家族連れ、大学生、海外留学生、老若男女まで多彩である。このように交流人口が増え、多くの人が棚田を訪れることで棚田は、地元高齢者からの稲作文化の伝承が行われ、また、現代の子ども世代の文化や若者文化、しいては海外文化の交流が行われ、受け入れ側も受け入れられ側もそれぞれに交流が深められる場となっている。

第２表　棚田オーナー等の参加者数

年	棚田オーナー	農業体験	棚田トラスト	延べ人数
H25	480	385	99	964
H26	425	405	211	1,041
H27	586	361	216	1,163
H28	449	302	190	941

（６）農村でも見かけることが少なくなった木製の臼と杵とかまどの餅つきは、もちがビニール袋に入れられて販売されている時代には思いもよらないもののようで、餅をついている姿は見るだけでも大きな感動であり、また、実際に体験もできシャッターチャンスとなっている。